



被災地の妊産婦さんとみなさんをつなぐ
東北こそだてレター (被災地の今...)

2013/5/21 配信 vol.9

～岩手県「まんまる」の活動から考える、～

◆ 支援実績 (2013/4/30 現在)

<支援母子数>

4月: 471組 【計4,382組】

<活動場所>

岩手 (大船渡・陸前高田・釜石・大槌・遠野)

宮城 (石巻、気仙沼、亶理、名取)

福島 (いわき、相馬、南相馬)

<活動内容>

育児相談会/茶話会/ベビーマッサージ/ベビ体操/
ママのリフレッシュ体操/親子ピクス/仮設巡回訪問

みなさま、こんにちは。一般社団法人ジェスペールです。最近のジェスペールメンバーは誇らしい気持ちであります。なぜかという、ジェスペールが支援している団体から二人も自治体の子育て支援に関する委員が選任されたからなのです。震災後、東京里帰りプロジェクトから継続して被災各地での妊産婦を支援してきた成果が目に見える形で見られ、ジェスペール及びジェスペールが支援する被災各地の妊産婦支援団体の方々とも、続けてきた甲斐を感じています。

さて、今月の「被災地から」は、岩手県の「まんまる」から、助産師の佐藤美代子さんの生の声をお届けします。佐藤さんをはじめとする4人の助産師が、本拠地の花巻市だけではなく、県内全域をケアすることになった熱い思いをどうぞご覧ください。

◆ 被災地から ～「助産師による復興支援 まんまる」 岩手県花巻市

<http://tohokumama.org/manmaru/k/>

<http://blog.goo.ne.jp/manmaru-mw>

岩手県内各地で母子を対象にした出張サロンを開いている「まんまる」。代表の佐藤美代子さんをはじめとする4人の助産師が、本業の合間をぬって広い県内を駆け廻っています。支援を必要としている妊産婦さんがいる土地へ、縁ある人がいる土地へ、距離が離れていても出張していきます。

活動拠点とその周辺地域だけでなく、県内全域に出向いて活動をしている団体は、ジェスペールの支援先では「まんまる」だけ。背景には、医療過疎や、地域で開業している助産師の少なさといった問題があります。妊産婦さんはもちろん、助産師ら医療従事者もまた「なんとかしなければ」と苦悩しており、その思いが出張サロンという活動につながっているのです。

佐藤さんは「いま活動しているすべての地域で助産師らが立ち上がり、その地域で母子支援の基盤ができるまでは支援を続けたい」と言います。その時まで、息の長い支援が必要です。そして、佐藤さんの文章を通して、沿岸部だけでなく内陸部で支援を必要としている人にも思いをはせてもらえたら幸いです。

◆◆内陸の助産師にもできる復興支援とは

全国で北海道の次に面積が広い岩手県。内陸の花巻市から沿岸部の北側に位置する久慈市までは、約180kmあります。久慈市に限らず、ほかのどの地域に行くにも車で相当の距離を走らないといけません。助産師の地域活動が手薄な土地を中心に、6カ所で「まんまるサロン」を開いています。



サロンの開始は、震災直後の2011年4～8月に、花巻市で「被災妊産婦受け入れ事業」を立ち上げたことがきっかけ。被災した妊産婦さん、新生児とその家族を受け入れ、産前から産後1カ月の間、花巻の温泉「健考館アネックス」で過ごしてもらったのです。その間、助産師が毎日ケアにあたりました。

その時、被災地へ戻って行く女性とその家族を見送りながら考えました。内陸に住む助産師としてどのような復興支援ができるだろうか。縁のできた方たちと長く、そして確実につながっていける方法はなにか——と。

そこで、以前から花巻・北上で行っていた「育児サロン」の経験を生かして同年10月にサロンを立ち上げました。沿岸部の宮古市を皮切りに久慈市、沿岸部と内陸とを結ぶ山間の遠野市などから始まり、お母さんたちがゆっくり座っておしゃべりをし、日ごろの思いや悩みを口にできる貴重な場となっていました。

このほか、震災で壊滅的な被害を受けた沿岸の大槌町では、震災後にできた「おおつちママサークルひだまり」の活動に助産師が参加させてもらう形で、母乳・育児相談やハンドマッサージなどをやっています。

大槌町の南に隣接する釜石市では、市内最初の仮設住宅「昭和園仮設」の隣にあるクラブハウスで2カ月に1回開催中。ここでは、仮設住宅で暮らすお母さんたちも歩いてやってきて参加しています。

サロンを重ねるごとに助産師との信頼関係を築いていき、その後遠方へ引っ越ししても頼りにしてくれている方もいます。

◇◆定まらない住居に不安

震災から2年が経った現在、住居の問題が大きな関心となっています。引っ越しをしたくても引っ越す場所がなく、自立しようにも自立できない家族の姿があります。内陸に住居を構えるのか、沿岸部に戻るのか、自治体の方針がはっきり決まらないところもあり、さらに数年後に状況が変化する可能性もあり、見えない先行きに不安を感じています。

また、次子を妊娠、出産する母親も多く、苦しい思いをした震災後の育児と照らし合わせながら、新しい環境での妊娠・出産、育児を経験しています。

笑顔で育児をできるようになった母親も増えてきました。

しかし、時間が経った今になって苦しみを感じ、ようやく口に出すことができはじめた方たちもいます。そのような方たちをみると、とにかく長く、ゆっくり支援活動を続けていけるように、息の長いご支援をいただければと願うばかりです。

◇◆沿岸部だけが被災地ではない

沿岸部にも出張してサロンを開いている私たちですが、一方で、被災地は沿岸部のみ、と限定して表現されることが多いことにもどかしさを感じています。

震災から時が経つにつれ、津波の影響を直接受けた方々も、かなりの方が沿岸部を離れました。でも、沿岸部に残っていても、仮設住宅に入っていないだけでも、被災者の心の傷は癒えていないのです。内陸に避難して家族と離れて暮らしている人も多くですし、支援やケアが必要な方は少なくありません。

私の住む花巻市でも、500人以上の避難者がいまだに生活しています。けれど、被災地支援は沿岸部に注目が集まりやすいため、内陸への避難者には支援の手が届きにくいのが現状なのです。

そこで「まんまる」では、その内陸避難者たちが気兼ねなく集まれる場として、支援団体「ゆいっこ」と共同で、母親たちのお茶会「沿岸ママ&グランマお茶会」を毎月開催しています。3月末には「ゆいっこ」主催のボーリング大会も開かれ、春休み中の小学生も一緒に、にぎやかで楽しい時間を過ごしました。

最近、テレビなどで被災地、被災者の様子が報道される機会が少なくなっています。3.11の前後には「もう悲しいテレビ番組はみたくない」という意見もネットで見ました。「遠くに住む人にとってはもう終わったこと、もう終わらせたいことなんだな」と思ったりしました。でも、復興の遅い街を見ると、もっとこの現状を伝えていかなくては、と思うのです。

被災支援団体が長く活動していると、自分たちの活動の方向性で悩むこともあります。けれど、決して無理せずに、自分たちのできる範囲でできる活動を続けていきたいと思っています。

今後は、沿岸部の母親や助産師が中心になり、サロンや地域での助産師の相談ができる場所が立ち上げられるよう、後方支援も始めていきたいと思っています。これからも、ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



【 追記 】

まんまるの佐藤さんは、出張活動に自家用車を使っています。
震災直後から2年以上、山道を走り続けた結果、タイヤも車体も傷み、大幅な車両の修理が必要になりました。岩手県内の活動の困難な状況を、みなさまにご理解いただき、まんまるへのご支援をよろしくごお願い致します。

以下、佐藤さんからの報告です。

2011年3月～2013年5月現在、走行距離約40000キロ。



震災直後は、ガソリンが十分に入荷する前から、内陸避難者を迎える準備を行い、花巻市内から約10キロ離れた「健考館アネックス」にて「被災妊産婦受入事業」を展開。2011年8月の最後の入所者が仮設住宅に入るまで、ほぼ毎日健考館に足を運び、入所された皆さんの生活用品や母児ケアグッズ集めに、50キロ離れた盛岡市の支援団体を訪問。

2011年9月～「まんまる」サロンとして、沿岸部への出張サロンを開始。

津波被害の大きかった沿岸部は当時、開業助産師が一人もおらず、助産師がママ達へ、ケアを提供する場がほぼなかったため、地元の助産師が立ち上がった大船渡・陸前高田を除く、沿岸部（久慈・宮古・釜石・大槌）などを廻る出張サロンを開催。

花巻・北上から一番近い「釜石市」でも、片道60キロ、往復120キロを走行。

「宮古市」へは、片道120キロ、往復240キロ。

「久慈市」へは、片道180キロ、往復360キロ。

一番遠く、東京に行くよりも時間がかかります。

「大槌町」は釜石から更に30分。

津波で破壊された海とがれきを眺めながら、山奥にある仮設住宅の集会場に向かいます。仮設住宅は道が狭く不便な場所に建てられており、冬道は対向車とすれ違うのも恐怖を感じます。

岩手は日本一広大な県で、内陸から沿岸部へは必ず山を越えなくてははいけません。

冬には厳しい寒さと雪で覆われ、通常2時間の距離も3～4時間かかることもあります。

そのような遠隔地でのサロンを月に4～5回行い、時には入手した支援物資を仮設住宅に住むママへ直接届けたり、ベビーバスやベビーカーなど大きなものを、生まれた病院へ直接届ける事も行ってきました。

これからも、地元の助産師とママ達が自ら、癒しの場を作れるようになるまでこの出張サロンを続けていきたいと考えています。

◆ プロジェクト応援のお願い

ジェスペールの「東北こそだてプロジェクト」は、被災地の母子を支援する助産師の活動を支援しています。

皆様からいただいた温かいご支援は活動の原動力となっています。

被災地の母子を今後も継続してサポートしていくため、妊産婦支援に関するお志を同じくするお知り合いの方がいらっしゃいましたら、ぜひ下記サイトをご紹介ください。

<http://tohokumama.org/donation.html>

また、皆様からの励ましのお声も、現地の助産師や被災地で子育て中のお母さん、ジェスペールメンバーの力になります。ご寄付いただく際に励ましのお言葉を添えていただいたり、当メールマガジンへのご感想などをお寄せください。



発行者：一般社団法人ジェスペール

公式ホームページ：<http://tohokumama.org/>

Twitter：<https://twitter.com/tohokumama>

お問い合わせ先：info@tohokumama.org

Facebook：<http://www.facebook.com/tohokumama>

